

9.初めての新品、特許出願管理ソフト「MASYS—PA」

まだパソコンが出始めて間もない頃である。NECの「PC-8801」という8ビットパソコンで漢字変換入力システムも無い時代である。当時は汎用コンピュータを使って大きなシステムで運営している特許部もあったが超大手企業に限られていた。それをパソコンレベルでやろうと企てた。

ニーズは間違いなくある。しかし、当時のアイアール社が開発するには金も人も無い。そこで知り合ったのがシステムビルドの創業者、山崎氏である。偶然にも彼は、同じコンセプトの特許出願管理ソフトを開発していた。当社初の新品開発は、お金なし、人手なしで、一気に進んだ。人との出会いが新しい事業を作る事を思い知った、

このソフトを売る担当者としてパソコンの操作方法を知らないでは済まされない。発明くんは、仕事を終えてから社員に内緒で東京八重洲口にあったパソコン教室に通うことにした。満足なカタログは作れなかったが、お客の歓心は高く、多くの引き合いがあった。しかし、肝心要のパソコンが無い(高くて買えない)。デモンストレーションをする場所もない。高島平にあるレンタル屋からパソコンを運んできては、狭くて汚い事務所(*)で、その都度、デモをした。

(*)とある大手企業の担当者が、日本アイアールの事務所を見て、”こんな酷い事務所で、やっているのか”と、同情してくれたらしく、日本アイアールの特許公報サービスを採用してくれた。これに似たようなケースが、その後もあった。やはり、嘘のない正直に商売することの大切さを痛感した。

発明くんは、何事かを始めると夢中になってしまうところがある。「MASYS—PA」のことばかり考えていると、靴下の左右が違う靴下を履いていても、ズボン下の前後を逆に穿いて小用に困っても、パジャマの上から背広を着ても、まったく懲りないでいる。カミさんが、パジャマがないと騒ぐので、そんなこと知ったことか、とズボンを脱ぐと、中から赤色のパジャマが出てきたこともある。電車なんかで座ると、裾から赤いものが「チラチラ」していたのかと思うと、冷や汗ものである。こんな人と、とてもじゃないが一緒に仕事なんかできないと言って、社員から見放されたとしても仕方がない。

補足:リコーがパソコンを発売した時期、このソフトを、「リコー仕様」に組み替えて販売をしていた時期もあった。少しでもリコーに対してして恩返しをしたかった。その後、リコーパソコン事業の撤退により PC-98 シリーズに切り替え、現在に至る。